

## ■ 第1回懇談会の意見概要

【参考資料1】

	意見概要	反映資料
稲庭委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>各機能の概要について、教育普及機能と交流機能、人材育成機能、創作機能、地域貢献機能がかなり重なりあっている。誰の何のための機能なのかを、名称と合わせて整理する必要がある。共創やエンゲージメント、アクセシビリティを各機能の中で考慮する必要がある。</li> <li>ワークショップでは、市民ミュージアムのコンテンツやコレクションの情報を出していかないと、川崎市民ミュージアムの魅力を持続的にしていくことは難しいのではないかと。</li> </ul>	資料1に反映
垣内委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>サテライト（まちなかミュージアム）やデジタルワールドをどううまく使って、内容を充実していくのかが今後問われてくる。また、ハードができるまでにいろいろなソフト事業をやるというのはすごく重要。</li> <li>修復を含め、市民の協力をいかに得ていくのか。そのための受け皿をどういうふうにするのか。プラットフォーム的な役割が非常に重要。</li> <li>将来的な財源を確保していくのか。寄付やクラウドファンディングもなどの新しい財源確保の道も含めて、マネジメント機能をミュージアムの中に組み込む必要がある。</li> </ul>	資料3に反映
金子委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域コミュニティを築いていくという地域貢献づくりのような機能もあってよいのではないかと。</li> <li>まちなかミュージアムの運営に市民が積極的に関わり、それが拠点の運営にも貢献するような流れができるとよい。</li> <li>川崎の自然史も含めて残し、市民に提示していくことも必要ではないかと。</li> <li>開設候補地を具体的に考えた検討することも必要ではないかと。</li> </ul>	資料1に反映 資料3に反映
佐藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>まちなかミュージアムについて、何か所ぐらいあり、それぞれがどのくらいの規模で、果たして誰がどんな人数で運営するのかがわからない。まちなかミュージアムが無かったとしても成立する本体を考えなければいけない。諸室や面積の規模、設備（消火環境や温湿度管理）の適切な整理も踏まえ、まちなかに作れるものと、拠点に作るもの考える必要がある。</li> <li>文化施設が集積する場所に移転するのであれば、各館それぞれの文化活動に関わる市民のコミュニティが一同に会することができるような拠点になるとよい。</li> <li>修復はこのミュージアムの非常に独自性となるので、きちんと残していけるとよい。</li> </ul>	資料3に反映
田中委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>拠点施設とまちなかミュージアムの機能の整理がまずは一番大事である。開館して、拠点とまちなかミュージアムの二本立てを永続的なものとするためには、開館後にもそれが成り立つような準備を開館前からしなければいけない。そのためには何が拠点施設に必要で、何を先行的に準備していかなくちゃいけないのかという議論が必要である。</li> <li>20世紀という時代は、川崎という年にとって非常に重要な時代で、ここをどう扱うのかということのもとても大事。</li> <li>ワークショップでは、ミュージアムが提供する学びのサービスに、どのような可能性や地域ニーズがあるのかを押さえておいた方がいい</li> </ul>	資料3に反映
八木橋委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>まちなかミュージアムの運営により学芸員の負担が非常に増える。管理運営のも含めて常に意識しながら計画していく必要がある。調査研究機能をまちなかに持って来る発想もあってよい。市民も一緒に調査をやっていく、研究をやっていくということが拠点に行かなくても味わえる、一緒に作業ができるということもまちなかミュージアムには、大事なことなのではないかと。</li> <li>融合による展示普及事業について、具体的に何が可能か、計画をしっかりと練っておかないといけない。</li> <li>修復活動（川崎における文化財修復）には、市民協働の場としての可能性が非常にある。</li> </ul>	資料3に反映
藤野委員 (公募市民)	<ul style="list-style-type: none"> <li>生田緑地から遠いところに住んでいる方や障害者の方に対して、アクセスがしやすい機能の強化が必要。</li> <li>洗い出された課題と機能の対応関係がわかる資料があると、必要性がわかりやすい。</li> <li>ワークショップの参加者に対して、金銭的ではないにしても、具体的なメリットが必要ではないかと。</li> </ul>	資料2に反映